

# 信州の蒲桃畫人天龍道人

脇 本 十 九 郎

凡上に一卷の書が横たへてある、題して「天龍道人事迹考」(大正五年出版)といひ、信州諏訪の人故武井一郎氏の著はす所である。その序にいふ、

今を距ること凡百五十年前其の齡五十左右にして信州諏訪に現はれ、九十二歳にして諏訪に病歿したる天龍道人の前半生は世間之を知る者なく、其子孫さへ之を知り得ざりしは能くその踪跡を晦まし得たりと謂つべし。明治廿七年の春予官職を文部省より佐賀縣に轉ずるに際し、無邊渡邊國武先生予に語りて曰く、天龍道人は竹内式部にあらずして肥前出生の人ならんと思ふふしありと。道人は諏訪に住すること四十餘年なれば、予が同郷人として見るを得べきのみならず、當時予が家、予が分家と常に相往來して風雅の交深かりし趣なれば、之が事迹を搜索するは予に於て最興味深かり云々。

この記述は余をして一讀愕然たらしめたことを白狀する。なほ白狀すれば余は從來天龍道人に就て知ること極めて薄かつた。固より余は信州に日本日觀とも稱すべき蒲桃畫人天龍道人あることを夙く知つて居た、信州人士は郷國の畫人として、雲室、蓬平、芙蓉等を説くにもまして道人を云爲する、しかし東京に於ては蓬美二家の畫

蹟の見難きが如く、道人の遺蹟もまた見難い。回顧すれば十餘年前諏訪の俳人として名ある小平雪人君、出京して余が知人の家に墨蒲桃一幅を展示す、その畫、法格に拘はらずと雖も氣骨の見るべきものあり、始めて知る是れ天龍道人その人の畫なることを。のち數年故中川潛光先生信州に講演に赴き、歸來余に語つて曰く、信州に天龍道人なる者あり、能く蒲桃を畫く、或る人余が道人を知らざるを憐みて隻幅を贈れるが、偶々知事公の懇請するに會ひて喜捨し畢んぬと。東京人の天龍道人を知らざること夫れ此の如きものがある、余の昨冬信州に遊ぶや、故にまづ天龍道人の遺蹟に接せんことを欲した。さうして松本の醫家草間氏藏する所の道人の詩稿蕉鹿編四卷を手にするに及んで道人に對する感興は勃然湧起するに至つた。如何せんわが身匆忙、今日まで經眼し得たるものは僅かに渡邊國武氏が明治廿二年上梓せる奇書「天龍道人傳」、榜して竹内式部勤王始末といふもの一篇に過ぎず。畫乘要略に天龍道人、住信濃、善墨葡萄と説けるが如きは天保の昔はやくこの逸傳の人を著録し得たる點に於て空谷足音の感あるのみ。しかも余や今、事迹考を繕くに至つて、天龍道人の事蹟の世に顯はるゝもの明治の世を以て始まり、その子孫だに久しく彼の何人たるを知らざりしことを知つて眞に愕然の情

を發するものである、天龍道人果して世を韜晦せるか、東京人士の彼に關して知ることの尠きも當然といふ外ない。

事迹考に従へば天龍道人、名は王瑾、字は公瑜（一に盧庵）、本氏板部、のち故ありて曾祖父の姓を冒して澁川氏を稱す。板部氏は世肥前の名家にして、道人の父堅忠佐賀藩の支藩鹿島藩に仕へて親

第一圖 墨蒲桃圖屏風

（美術研究所原板）

族格家老職たり、時に本藩の藩主鍋島（松平氏）吉茂子なく、弟宗茂家を繼ぎ更に宗茂の子宗教を以て嗣とせんとしたが、宗教病弱の爲め鹿島藩主鍋島氏の長男直郷を以て之に代ふるの議あり、且つ鹿島藩は直郷の弟直年をして後を繼がしめることとしたが、直年夭折のため、家老板部氏の子にして風神秀徹の稱ある貫之を以てその繼嗣に擬するに至つた、この貫之こそやがて後の天龍道人にはあれ。しかも如上の繼嗣策動は貫之の父堅忠の陰謀に本づくものと讒する者あり、藩論二派に岐れていはゆる小鍋騷動を惹起し、堅忠は配流され、貫之また一朝にしてその夢を奪はれた。（道人がその詩文稿を蕉鹿編と名けたのは列子に譬を借りてこの夢を諷したものと思せられる）貫之年少時の性行に就ては多く知る所がないが、屢々粗暴の振舞あり、父これを憂へて同州神埼郡朝日村なる安國寺に遣り、同寺第八代の寺主泰嶽師に就て得度せしめた。安國寺は鹿島侯の祖先直朝の次男格峯<sup>（ヤシ）</sup>家外和尚を中興とするのみならず、天龍道人の兄湛堂和尚が九代の寺主たりし因縁淺からぬ寺であつたらしい。

既に僧となつた天龍道人に對しては藩の掟もしかく拘束する所なかりしにや、道人の直話を基として道人の死前一年、事迹考の著者武井氏の祖父見龍道人が物した天龍道人碑碣銘によれば、道人やがて京に出で、青蓮院宮の知遇を忝うし、命を承けて浪華に下りて無量壽院を創建し、また御室の爲に功を樹つることあり、是より先き道人前亞相萬里小路韶房卿の猶子として普明院と號したが、今や更めて天恩院と號したといふ。（當時の青蓮院宮は尊眞法親王と申し、博學高德の聞えあり、また藝術の嗜好深くましくて陶工木米が所謂粟田御用窯の命を蒙つたのもこの宮の頃である）而して更に事迹

るとし、その悲壯の志を諒として紙上の記念碑を建てられんとしたのも、今日から見れば笑ふに堪へたる言説であるが、そも式部の後半生と道人の前半生とが互に相隠れて、しかも其間一脈相通する或るものを求め得べき要素なしとしない爲めであつて、若しまた事迹者の著者がその序にいふ如く渡邊氏の一語が武井氏を起す動機となつたとするならば、「天龍道人」の一書、必ずしも無用の長物でなかつたとしなければなるまい。

以上、余は天龍道人の前半生に就て説くこと多きに過ぎたやうであるが、彼が蒲桃畫人として世に鳴つた後半生、即ち信州在住時代を髣髴するには是非ともこれだけの豫備知識を必要とするのである。さても天龍道人は如何にして信州の地を墳墓の地と定めたであらうか、事迹者の著者の推定する所によれば道人が諏訪に入つたのは道人五十歳前後、明和の頃といふ。この推定は漫然たる推定でなく、前記碑碣銘によつて明白である。曰く、時上下有大窮、爲欲救之、約ニ豪富數十家、赴ニ東武、先修ニ鎮宅靈符之法、行之、聲譽大發、大小之諸家歸依日多、士庶男女請益者雜還滿門、時有下倚食于家僧云東明、授與天部之法、出館下谷、於是道人雖欲意避於世、以下所諾浪花宿志難捨、徧權家計之、命既下而事遽欲成、前是官人中有下與道人義氣相背人、道人生平穎脫質直、諫之面析、官人忽觸赫怒嫉之甚、竊妨之、事竟不果、道人云、嗚呼是天也、時未至歟、何以爲恨、於是我不可不知天命、直奔將來志、不冉顧如脫躡、時年四十二、父既就瘞矣、道人曰、世不捨我、我何得捨世、可謂不幸亦吾幸哉、即變名改衣、自稱世外之閑

考によれば道人三十一歳の時長兄誠章が肥前に於て板部氏の名跡を再興するを許されてからは、彼の身も愈々自由なるを得て京江戸大坂の間を來往し、搢紳家の門にも出入した、寶曆の竹内式部事件には道人も龍造寺主膳と名乗つて勤王の謀議に與つたといはれて居るが、これらの説は事頗る唐突で、碑碣銘もこの事に及ばない、當然後の研究を待つべきであらう。かの渡邊國武子が當年遠島に處せられたとのみにて終焉を明かにせぬ式部の後身こそわが天龍道人であ

道人、負<sub>レ</sub>笈戴<sub>二</sub>星冠<sub>一</sub>、周<sub>二</sub>遊于四方<sub>一</sub>、……前<sub>レ</sub>是有<sub>二</sub>欲<sub>レ</sub>歸<sub>二</sub>隱豐長兩國間<sub>一</sub>約<sub>二</sub>西欲<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、路經<sub>二</sub>信州諏訪<sub>一</sub>、怡<sub>二</sub>湖水之勝狀<sub>一</sub>、愛<sub>二</sub>溫泉之佳<sub>一</sub>、淹留數旬、終撰<sub>二</sub>地湖北<sub>一</sub>、卜<sub>二</sub>隱名<sub>二</sub>永湖觀<sub>一</sub>、居數歲、鵞湖則以<sub>二</sub>天龍河泉源<sub>一</sub>號<sub>二</sub>天龍道人<sub>一</sub>。記文聊か明徹を缺き、前後の事情曖昧を免れず、その所謂大窮の何たるを尋究する暇をもたぬのを遺憾とするが、人世行路難に際會して道人の心境一轉期に入り、偶々諏訪の景勝に對して深く相契る所あり、(高島藩が道人の畫鷹に便よかりし事情もあり、そは後に説く)一隱士としてこゝに身を晦まさんとした事情は臆ろげながら察知することが出来る。道人や元來「性素狂」、また胸中鬱勃たる不平を藏する者、禪宗に人となりて天台に入りたるだに不思議なるに、天狗を使ひて大木を倒し、晴天に雨ふらすなどいふ口碑の類、事柄は變れ平賀鳩溪を聯想せしむるものならず。その名を瑾、字を公瑜と稱せるも屈原が瑾を懷き瑜を握りて窮して示す所を知らず、空しく流浪落魄の身となりしに共鳴せるものにして、姓を王といふも遠祖澁川氏が六孫王經基の裔たるによること事迹者の著者の説く所の如くであらう。而して道人六十四歳の時偶々高島藩に繼嗣に關する二ノ丸騒動あり、道人百方奔走その力によりて諏訪氏の長子忠肅幸に事なきを得たる如きは道人が經世の志未だ銷磨し盡さざる一證となすべきではなからうか。(諏訪忠肅時に年十四、曩に道人が鹿島藩主たらんの夢を結べる時もまた十四歳、道人の感慨殊に深きものありしならんと事迹者の著者いふ)信州の某氏に天龍道人七十七歳即ち喜壽の壽像を傳へて居る、道人の畫を學ぶもの文龍、艸龍子、象山等多かる中に天鬼子馬髻なる者の寫す所に係り、圖上道人の心友たりし松代長國寺の前住千丈巖禪師の贊を

載せて居るが、今其圖を見るに其人演劇に見る鬼一法眼の如く長髪を蓄へ道服を着して榻に坐し、左臂を脇息に支へ右手に如意を執り、傍に朱鞘の大刀を架し、徐ろに一炷の香を聞く。口碑傳へていふ、道人平生身に白無垢を纏ひ、天國の短刀の楠公短刀の圖の拵へに倣ひたるを帶び、年老いては武器も懶しとて手頃なる鐵丸を弄び、人の請するあれば座を設くるを待ちて始めて腰を下すと。(その菓子喜びて酒を口にせざりしといふは寧ろ想像に反す)彼此想ひ合せて道人の人となりを知るべきである。蓋し二ノ丸騒動以後道人が一人浪人として致仕を沮みつゝも、如何に一藩の長老として尊敬せられ

第二圖 蕉鹿編(北遊漫稿)

(美術研究所原板)



たかは文化二年八十八歳にして門人青木文龍を養子として藩士に加へられんことを郡奉行所に願上ぐる書に、「無徳の拙者假にも先生杯と被稱」と言つて居るのもわかる。ところで彼は生涯獨居したかといふにさうではない、事迹考の記す所によれば夙く京都にある頃宮家の家臣某の女と契りて一男一女を挙げ、その後また何時の頃か林氏を娶つた。道人の詩文稿蕉鹿編の中に追懷女子阿綾と題して

(美術研究所原板)

第三圖 蒲桃畫則(其一)

妖艶如花自香、春  
秋暫住十餘霜、空餘神  
女巫山色、暮雨朝雲惹  
恨長の一首を見るは、  
やがて天死せる女兒に  
對する追慕愛戀の情を  
洩らしたのであつて、  
道人の晩年轉た寂莫の  
心境に同情する。道人  
晩年の居常に就いては  
蕉鹿編を涉獵するも手  
がかりを得ないが、恐

らく閑に任せて畫技にいそしみ、時あつて或は詞友を會し、或は吟杖を曳き、また鐵筆を執つて得意の篆刻に浮身を盡すこともあつたのであらう。事迹考によれば道人七十一歳にして浪花に遊び、八十三歳配林氏を失ふの翌年には邑内の男女年八十を越ゆる者廿一人を蕉鹿園に招集し、香山尙齒會に擬へて賀宴を開き、門人文龍をしてその圖を畫かしめ、自ら一韻を以て七絶四十三首を賦してこれに題

し、のち更に七首を加へて五十首として墨刻し、これに蕉鹿園老集圖と名くる唐紙半折の摺物を添へて四方の舊友に贈つたといふ。その加越の遊を試みしは翌々享和三年八十六歳の時であつて、旅中の詩文を蒐錄せるものを北遊漫稿となす。その巻頭の吟にいふ、三歳病痾空伏枕、豈圖再得復平生、猶餘山水難癒癖、又駕籃輿北發行。道人晩年の病は脚疾に加ふるに眼疾を以てしたらしいが、詩中にいふ痾は何であつたらう、兎に角生來煙霞の癖は炎蒸中山道を發して梅花金澤の遠きに老軀を運ばしめたのであつた。爾來また家に蟄する五年、一日道人は死期の近づくを知りて筐底深く秘めたりし大封の書類を焚き、生也如斯、死也如斯、縱到無生死亦如斯、即今無生死外如何、咄呵呵呵呵、呵呵呵呵呵、維摩一默猶是痴の一偈を遺して道人のいはゆる夢長き生涯を終つた。時に文化六年八月廿一日、行年九十二。この年齢の算定は蕉鹿丁卯集に維戊戌(享保三年)我以降神、壽域此開九十春とあるに據ると事迹考に説くが、これは「蒲桃畫則」文化三年の道人自序に余既八十九歳といへるとも符節を合すること勿論である。

天龍道人晩年の胸懷乃至交友等を知るべきもの蕉鹿編に如くはなからう。余の草間氏より借觀し得たるものは七言律一、題畫題贊、雜篇一及び北遊漫稿の四冊であつて、私かに以て新發見とし、鬼の首でも取つた心地で信州を引上げたのであつたが、事迹考を讀むに至つて是れ亦たその然らざるを知つた。事迹考にいふ、蕉鹿編載詩千三百餘首、文五十餘、蓋有闕本と。しかも事迹考卷後抄錄する所の詩文合せて八十篇を検するに、余が借觀せる四冊中に含まるゝもの

が少くない。事迹考の著者が寓目せる蕉鹿編と余が借観せる四冊とは果して同物か、抑又同一蕉鹿編の寫本數本あるか、すべて今知らない。たゞ余が借観せるものは手澤年古り、且つその筆蹟蒲桃畫則の書體と頗る似通へる節あり、就中北遊漫稿の一冊は題簽の傍に藍色もて「潤色成」と覺書せる如く卷中或は紙片を貼し、或は塗抹して同じ藍色又は墨にて訂正を試み、序文の如きに至つては殆ど潤色滿紙、また卷頭北遊雜錄の二字を更めて漫稿とするのみならず、隨處鼈頭に「除」の一字を下すなど、一見これこそ自筆本として疑ふの餘地なきもののやうに思はれる。渡邊子はいふ、「道人嘗て蕉鹿編を上梓するの意ありて手自之を校正し、其序を天山翁（信州高遠藩土坂本氏）に託して、其成りたるを謝するの尺牘あり、然れども其序は散逸して今傳はらず」と。而して事迹考に「遺稿十餘卷の如きも道人の自筆は極めて少く、多くは老年眼疾を力めつゝ、人をして詩集中より後半生分のみを書取らしめたりと見え、前半生の作と覺しきは殆見ることを得ず」といふのは、たま／＼武井氏の寓目せる蕉鹿編の自筆本ならざるを語るものではなからうか。

天龍道人逝いて星霜茲に百餘年、骨は泉下に朽ちんとしてその畫ひとり詩と共に残る。余は信州に赴いたけれども、天龍道人の爲に專らにした旅ではなかつた、故に觀る所極めて乏しかつた。幸に濱野厚美君數幅を借り來つて余に示された。（蕉鹿編の發見も同氏の好意に負ふ）中に一幅蒼鷹猿を逐ふの圖あり、余觀ていふ、この人必ず長崎派の人ならん。（時に人ありいふ、天龍道人は山縣大貳なりと、今にして思へば渡邊子が道人即竹内式部なりといへるを、更に

甲州の志士山縣大貳と誤り傳ふるのみ。今事迹考を繙くに至つて果して天龍道人の若くして肥前にあるや長崎に赴いて熊斐に學んだことを知つた。頃日國武子の令兄千秋伯の後なる渡邊家に道人の畫蹟を藏するを聞き、往いて觀るに玄關の大衝立をはじめ六曲屏中にもまた鷹を見る。その外數幅の小幀を合せて虎あり鶴あり孔雀あり梅あり竹あり柳あり芭蕉あり蘇鐵あり、その題材は七八にして止まらぬが、何故か氣魄極めて乏しきこと意想の外にあり、曩に信州に於

（美術研究所原板）

第四圖 蒲桃畫則（其二）

て目撃せるもの、或はその偽蹟ならざるかを疑ひしが、渡邊家の藏幅を觀るに至つて天龍道人遂に畫人としては一箇の田舎漢に過ぎざるを知つた。事迹考引く所の「信州仙人床」にいふ、道人「鷹を好みて畫けるが、諏訪は代々鷹の家なりと聞き

て住居し、鷹匠部屋を頼み凡七年が間春夏秋冬の符のかはり羽のかはりを見定め、鷹の祕事口傳を悉く傳授し遂に其妙を極めたり」云云、又併せ引く所の太田南畝が一話一言には「信州諏訪に虛庵といへる異人あり、養鷹の法に精し、又能く鷹を畫く」といへるが、知る者必ずしもよく神を捕へず。渡邊家の六曲屏中雪竹に南天の珊瑚を配する彩畫の如きは宛として婦女子の手に出づるが如き媚態をさ

へ呈する。かくて余は有體に白狀すれば天龍道人に失望したのであつたが、然らば天龍道人全く語るに足らざるか、曰く否、その墨蒲桃に至つては眞に蒲桃畫人の名に負かぬものと稱したい。渡邊家の藏奔に係る蒲桃畫中の王は六曲一雙の大畫である。一隻は老幹下より上に伸びて靜を示し、一隻は幹なくして簇々たる垂枝や、風に搖る。併せて是れ昇降の草龍を示すものにして、日觀破袈裟描の滋味こそ無けれ、道人の所謂盤龍の幹、霍膝の枝、蝙蝠、飛燕、胡蝶狂花の葉、驂毛、龍鬚の蔓の陰に累々紫珠綠珠を著くるものであつて、墨痕淋漓、氣三斗を吐くの概がある。各隻屏面の半ばを割いて大字もて一詩を加ふるに、その書はた龍蛇奔騰の勢なからず、款して享和三癸亥孟春天龍道人八十四歲併題といふ。恐らく道人一代の代表作に推すべきものであらう。事迹考にいふ、「道人が四季の蒲桃を寫生せしことは我が幼時郷里の老人に聞きたる所」にして、「遺稿中蒲桃の詩無慮一百首を得べし」云々。渡邊子また道人が親しく蒲桃の名產地甲州に出かけて寫生に力めたる由を記して居るが、道人の遺著「蒲桃畫則」を観る至つて傳説の我を欺かざるを知る。序にいふ、余自<sub>レ</sub>少好<sub>レ</sub>寫<sub>二</sub>蒲桃<sub>一</sub>、好而無<sub>レ</sub>倦、遂爲<sub>二</sub>痼癖<sub>一</sub>、大凡上下千古周覽、所<sub>二</sub>各寫<sub>二</sub>之畫<sub>一</sub>、其巧者失<sub>レ</sub>俚、其雅者失<sub>レ</sub>拙、或墨猪、或粉蠹、而無<sub>二</sub>全備者<sub>一</sub>、故余極<sub>二</sub>眞於天象<sub>一</sub>、驅<sub>二</sub>象於造化<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>之精神<sub>一</sub>、新設<sub>二</sub>規則<sub>一</sub>、別成<sub>二</sub>一家<sub>一</sub>、自號<sub>二</sub>草龍<sub>一</sub>、自適以爲<sub>二</sub>一樂<sub>一</sub>矣と。蒲桃畫則は文化三年の著にして世流傳多からず、余が藏する一本は奥附を缺き、發行の年月と出版の書肆とを明かにせぬが、定めて道人在世中の上梓に係る自刊本であらう。全卷寫生に入りて寫生を出でたる筆意頗る稱すべく、板刻の精到また當時にあつて稀に觀る所。而して序中、門人古

田重輝曾學<sub>二</sub>余筆意<sub>一</sub>、今將爲<sub>レ</sub>癖也、因付以<sub>二</sub>余所<sub>二</sub>私設<sub>一</sub>蒲桃畫則及草龍號<sub>一</sub>と言へば、編著の來由また明白。

余偶、信州の地に赴き、一時の遊戲、事迹考等の記述を借りて漫りに數奇の畫人天龍道人を傳すと雖も、見聞甚だ淺薄、説いて足らざる所多く、誤謬はた少しとせまい。慚々愧々。

#### 蕉鹿編中より

寫蒲桃併題上前亞相中山卿

草龍乍發端、風雲滿畫中、吐出數顆玉、用祝卿無窮。

雪蒲桃

王維與<sub>二</sub>王瑾<sub>一</sub>、異世姓相同、蒲桃傲雪蕉、與伊欲鬪工。

畫蒲桃

五月初發、淡似片雲懸、別是好風色、自入畫圖妍。

同前畫

今古寫<sub>二</sub>蒲桃<sub>一</sub>、未見曾描<sub>二</sub>花<sub>一</sub>、我此寫新樣、乍自作<sub>二</sub>一家<sub>一</sub>。

蒼鷹下蒲桃

寫出箇一蒼鷹、奮然<sub>(勳力)</sub>翺<sub>二</sub>自豪<sub>一</sub>、由來非是貪菓、求食寧下<sub>二</sub>蒲桃<sub>一</sub>。

寫蒲桃併題奉納藥師佛

藥王能爲<sub>二</sub>醫衆病<sub>一</sub>、枯筆回春畫亦香、請見蒲桃新掛玉、玲瓏映出琉璃光。